

二〇二一年度 第一回

国語 (50分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから31ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号		

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

六郷土手ろくごうどてのそばの小さな旋盤工場せんぱんが、今の茂夫しげおの職場である。勤めはじめて半年近くが経たとうとしている。

半年前、失業した茂夫が地元の飲み屋でくたを巻いていたところ、偶然ぐうぜんに中学の同級生だった秋庭あきばという男にでくわした。秋庭の勤めている工場で使っていた運転手兼けん使い走りの十八の坊主ぼうずが行方ゆくえをくらましてしまい、オヤジ——というのは工場長のことだった——が困っているという。ヒマならばそのあとに来ないかという。

勤め先の編集プロダクションが潰つぶれて①自暴自棄じぼうじきになっていたこともあり、ぶらぶらしているよりは運転手でも何でもやっていたほうがいいのか、くらいの軽い気持ちで引き受けた。②大学を卒業して町工場の納品トラックの運転手になろうとは、自分でも思ってもみなかった。

以前勤めていた編集プロダクションは神田にあつて、業界では中堅ちゅうけんで通っていた。学生のところから編集の仕事をしたいと思っていた茂夫にとっては、一応希望どおりの職場だったと言える。自転車操業だということは入社して一年ほどで③サッチしたが、まさか倒産とうさんするとは予想もしなかった。しかも社長と④カンブ社員数名はどこへ行ったのか判らわかなくなってしまう、残された茂夫たちは事後処理にへとへとになった。秋庭に会ったのはそのころである。

今トラックの運転手として働いている工場は、工場長を含ふめて工員は六人。典型的な孫請まごうけけ、ひ孫請ひまごうけけの零細工場れいさいである。最初はなから給料に期待などしていなかったが、編集プロダクションにいたころとはもちろん比べものにならない。長く勤める気などまるでないが、Aと半年を過ごしてしまった。

半年いても、茂夫はいまだに工場の雰囲気ふんいきに慣れることができない。工場長をオヤジと呼はず吉沢さん、と苗字みょうじで呼ぶのは茂夫だけだった。知り合って間もない六十すぎの男をオヤジと呼ぶのは茂夫にとっては⑤キイなことだった。坊ちゃん——。茂夫に

つけられた工場での渾名である。旋盤工たちは大抵が地方出身者だった。

工場にいと自分の人生がどんなおかしな方向へ向かっていってしまうように感じながらも、茂夫は毎朝定刻に工場へ出勤する。自分とは全く違う世界のような気がするのに、切り子だらけの洗油臭い工場は妙に居心地が良いのだった。この居心地良さの原因は何だろうと、茂夫は時おり不思議に思ったりもする。けれど、③早くここから脱出しようと茂夫が焦りはじめているのも事実だった。

納品を終えて工場に戻った茂夫がガラス戸を開けると、待っていたらしい工場長の吉沢が茂夫を手で①マネいた。困ったような顔をしている。茂夫はどきりとした。このような孫請け専門の工場では、一時間の納期遅れが命取りになる。給料は安くても、そういう意味で納品トラックの運転手はたいへんな仕事なのだ。

「何か……」

茂夫は ②B と吉沢に言った。

「いやあね、言いくいんだけどさ……。坊ちゃんは、これからどうする心算でいるかと思ってるさ。」

「えっ？」

吉沢の言っている意味が判らず、茂夫は怪訝そうな顔で聞き返した。

「いやさ、坊ちゃんは大学も出てるし、いつまでもこんな工場にいる気はないだろ」

「はあ……」

「いざれ辞める心算ならさ、もう求人をはじめたいんだよね。求人難は知ってたさ。早めにしないとさ。④黙ってやられたんじゃ、

あんたも気分悪いだろうと思ってる」

「……………」

「あんたはよくやってくれてるよ。こないだは鶴見の担当に ⑤ヒニクられても、イヤな顔ひとつしないで仕事つないでくれたしさ」

いつも無理な納期を指定してきて、ちょっとでも遅れるとネチネチやり出す鶴見の得意先の工場に平気な顔で行けるのは、何も茂夫の人間がデキているせいではなかった。こっちがひ孫請けならあつちは孫請け、所詮この世界の根っからの住人ではない茂夫にとつて、同じような零細工場が僅かな差で力関係を誇示したところで痛くも痒くも感じないというだけの話であった。⑤感謝されてもあと味が悪い。

工場長の吉沢と話を終えたあと、茂夫はなぜだか夢も終わりだな、と思った。六郷土手の旋盤工場で過ごした半年間は、茂夫の人生の中では特異な存在といえる。もともと茂夫のような男が旋盤工場の納品トラック運転手というのは、誰が見てもおかしいことだった。居心地良いと思えたのは、高校、大学、そして就職した会社においても茂夫が持つことを当然としてきた競争心という緊張が、いつとき休まされたからだろう。半年間は人生の休暇、一時の夢と思えば、気持ちも楽だ。

「そうですね」

工場長の吉沢にそう答えたあと、けれどなぜか茂夫の心は虚しかった。

「巢だな……」

信号待ちの交差点で、ハンドルを握った茂夫の独り言に、隣の席で脚を組んでいる秋庭が変な顔をした。

「何が？」

⑥「いやさ、工場のこと。巢みたいだよ、なんだか」

「巢——？ わっかんねえなア」

秋庭は笑いながら続けた。

「昔っからわかんなかったな、俺たちにとつてあんたは」

信号が青になった。茂夫はアクセルを踏んで秋庭の顔をちらりと見た。

「どうして?」

「勉強なんかしてないみたいなのに頭よくってさ。いい高校行って、いい大学行って、いい暮らししてるのかなアなんて思ってたら場末の酒場で酔いつぶれてやんの、あんどきは笑っちゃったよ」

茂夫は苦笑した。秋庭は中学のころから不良グループの一員で、高校時代に見かけたときは髪の毛が茶色かった。工業高校を中退して旋盤工になったと聞いた。今では一歳になる女の子の父親である。

「俺にしたって、秋庭はわかんない奴だよ」

茂夫のことばに、秋庭は声を立てて笑った。

「俺なんてカンタンな男よ、旋盤工だもん」

秋庭の答に茂夫も一緒に笑った。

「辞めちゃうの、工場」

「次のが見つかるまではいるよ。でも、まだやりたいと思ってることもあるし……、俺は技術ないから薄給だしさ」

「そうだよな、やっぱ、⑦ 水に合わねえよな、あんたは」

そんなことはない、俺だって工場は——今までにいたところは別の意味で——心地良いよ。そう言おうとしたがやめた。言ってしまうとそのあとの説明が難しいし、秋庭の言ったことも真実だった。

秋庭が腕時計に目をやった。

「あと十分か……。間に合うな」

川崎の工場街の裏通りを走っていた。このあたりのややこしい細い路地も、半年のうちに覚えこんだ。普通のドライバーだったら徐行せざるを得ないような幅の狭い道も、五〇キロで走れるようになった。

三十分前。ギリギリだが約束の三時に納品できるだろう。そう思ったときに秋庭がチツと舌打ちをした。

前方から、茂夫たちが乗っているのと同じような、古い小型トラックが近づいて来ていた。普通の乗用車でもすれ違いは困難な狭い道である。トラック同士のすれ違いはできそうにもないが、両脇は工場の塀で、どちらかがひとつ手前の角までバックしなければならぬ。

「C」

茂夫が秋庭の顔を見ながら言った。

「馬鹿野郎、そんなことしてるヒマがあるかよ」

「D」

そう言ってギアを握った茂夫の手を、上から秋庭の手が押さえた。

「このまま突っこめ」

「E」

「いいから行け」

秋庭の顔は真剣だった。対向車との距離はどんどん短くなってきた。無理だ——。茂夫は思わず目をつむりそうになった。その瞬間、ガリガリとひどい音がした。

——やった。

右のミラーがひしゃげてこちら側を向いていた。左のミラーは塀で擦ってあちら側を向いている。あの音から察するに、側面もひどく擦っただろう。

あちらのトラックの運転手が、窓から身を乗り出して茂夫たちのほうを振り返っている。むこうのトラックのミラーも、両方あらぬ方向を向いていた。側面の擦れもかなりひどい。

秋庭があちらのトラックの運転手と同じように窓から身を乗り出した。

「悪い」

あちらのトラックの運転手と秋庭が、同時に片手拝みをして言った。

「走れンでしょ」

「全然大丈夫。そっちは？」

「大丈夫。じゃ悪いけど急いでっから」

そう言い残してトラックは後方に去った。秋庭も当然のような顔をして窓を閉め、「早く」と茂夫をせかした。茂夫はたった今起きた出来事が信じられない気がした。

「……あれで済んじゃうの？」

「あー?」

「今の、接触事故だよ」

「何言ってるだよ、こんなボロトラックに接触事故もクソもあるかよ」

突然、^⑧茂夫は笑いたくなくなった。工場のあの居心地良さの秘密が、ひとつ解ったような気がした。

三時にギリギリで間に合った。帰り道、居眠りをはじめた秋庭の横でハンドルを握りながら、^⑨茂夫は工場に帰ったら吉沢をオヤジと呼んでみたいと思った。

【問1】

① a) e) のカタカナを漢字に改めなさい (楷書で丁寧^{かいいい}に書くこと)。

- a) サッチ b) カンプ c) キイ d) マネいた e) ヒニク

【問2】

——①「自暴自棄じぼうじきになってた」、——⑦「水みづに合あわねえ」とありますが、「自暴自棄」、「水みづに合あわない」の意味として適当なものをそれぞれ選び、(ア)～(ク)の記号で答えなさい。

① 自暴自棄

- (ア) そばにいる人に対して遠慮えんりよせずに、自分勝手な行動をとること。
- (イ) 周囲にいる人がすべて自分と敵対する関係となり、孤立こりつすること。
- (ウ) もうどうでもいいという気持ちになって、なげやりな態度をとること。
- (エ) 何をやってもうまくいかないのは、自分の行いが原因だと考えること。

⑦ 水みづに合あわない

- (オ) 属ぞくしている組織の体質になじめず、うまくいかない様子。
- (カ) 納得なっとくすることができなくて、気持ちがさっぱりしない様子。
- (キ) 費ついやした労力に比べて、対価となる利益がつり合あわらない様子。
- (ク) それまでの努力や苦勞が、いっさい無駄むだになってしまう様子。

【問3】

——②「大学を卒業して町工場の納品トラックの運転手になろうとは、自分でも思ってもみなかった」とありますが、
どういうことですか。その説明として最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 苦勞して大学を卒業したにもかかわらず、茂夫は現在の仕事に必要な技術を身につけられなかった、ということ。
- (イ) 茂夫にとってこの仕事は、大学に通っていた頃の自分が思い描いていたものとは大きく異なっている、ということ。
- (ウ) 大学卒業後、すぐに就職した会社が自転車操業だったので、茂夫は現在の自分の仕事に満足している、ということ。
- (エ) 大学に進学することが目標だった茂夫は、卒業した後に就く職業について具体的に考えていなかった、ということ。

【問4】

文中の A・B にあてはまる語として適当なものをそれぞれ選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

- (ア) ぶらぶら (イ) じりじり (ウ) おずおず (エ) ずるずる (オ) しみじみ

【問5】

——③「早くここから脱出しようと茂夫が焦りはじめているのも事実だった」とありますが、なぜですか。茂夫がそのように感じる理由として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 工場での日々が張りつめたものであるうえ、工員たちの奇妙な人間関係にいったん取り込まれてしまったら二度と抜け出せなくなりそうで、ほんやりとした不安を感じるから。
- (イ) 工場に腰を落ち着けるつもりはないのだが、このまま工場の生活になじんでしまうと、自分が本来いるべき場所に戻っていけなくなるような気がして、いらだちを覚えるから。
- (ウ) 工場に漂う雰囲気^{ふんいき}に毒^{どく}されて、いつしか自分が作業場の汚れた様子や工場に満ちている悪臭^{あくしゅう}にも嫌悪感^{けんおかん}を抱かなくなってしまうことが、なんだか恐ろしく思われるから。

- (エ) 工場で働く人たちの、親密で、和気あいあいとした関係はうらやましくもあるが、自分は所詮^{しよせん}、その仲間に加えて

はもらえないのだと思うと、いたたまれない気持ちになるから。

【問6】——④「黙だまってやられたんじゃ、あんたも気分悪いだろうと思って」とありますが、この時の吉沢の言動に関する説明

として最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 茂夫の意見を聞かないで人事をすすめれば、学歴を鼻にかけている茂夫のプライドが許さないのであるかと危あやぶんでいる。

(イ) どうにかして茂夫には辞やめてもらいたいと思っているが、できるだけ穏便おんべんに事をすすめようと茂夫の反応をうかがっている。

(ウ) 当人を差し置いて事をすすめれば茂夫の気持ちを傷つけるかもしれないと考えて、まず茂夫の意志を確認かくにんしようとしている。

(エ) 茂夫が自分に対して本心を語らないことにいらだっていたため、直接話し合うことで茂夫の決心をくつがえそうとしている。

【問7】

⑤「感謝されてもあと味が悪い」とありますが、どうしてですか。その説明として最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 吉沢が自分を解雇するつもりであると知った茂夫は、自分の仕事ぶりに対して吉沢がどれだけ感謝の言葉を口にしても、不快感を覚えるだけであったから。

(イ) すべてを失った自分を救ってくれた吉沢に感謝している茂夫は、自分の仕事ぶりを吉沢が評価するのを聞いて、工場を辞めることに申し訳なさを感じたから。

(ウ) 工場^{あた}で与えられた仕事に対して真面目に取り組んでこなかった茂夫は、自分の仕事ぶりを吉沢が誠実だと判断しているのを聞いて、ばつの悪い思いをしたから。

(エ) 取引先で出会った人たちに対して真剣^{しんけん}に向き合おうとしていなかった茂夫は、自分の仕事ぶりを吉沢が誉めるのを聞いても、素直^{すなお}に喜ぶことはできなかったから。

【問8】

⑥「いやさ、工場のこと。巢みただよ、なんだか」とありますが、これに関する次の説明文を読み、文中の(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

茂夫は工場の人々を作る関係に対して、(1)

- (ア) 無関心な態度を取っている
- (イ) 自分から距離を置いている
- (ウ) なれ合う様子を嫌っている

ところがありました。工員た

ちは茂夫のことを、「坊ちゃん」と呼んでいます。親しみを込めつつも、

(エ) 茂夫の経歴や生きてきた環境かんきやうが自分たちと違うちがう
 (オ) 工場長に目をかけられている茂夫がねたましい
 (カ) 将来を期待される茂夫に工場の未来を託たくしたい

という思いが、こうした渾名あだなにつながったと考えられます。

一方で、茂夫は、工場での半年間を、(3)

(キ) 身体しんたいを使って働く充実感じゆうじつかんを得られた時間
 (ク) 努力の成果を感じることができない日々
 (ケ) 張り詰めた生活からの、つかの間の解放

だったと振り返かえっています。工場を去ることが現実になろうとしているこの時になって、茂夫はなぜか喪失感そうしつかんのようなものを抱いたのです。

その後に、茂夫は秋庭との会話の中で、「巢」という言葉を口にします。

それは、(4)

(コ) できるだけ目立たないように隠れ潜ひそんでいる
 (サ) 小さな空間で人々が寄り添より添そって暮らしている
 (シ) 抜けられない複雑むざんなしがらみに覆おわられている

という漠然ぼくぜんとしたイメージからの連想ではないでしょうか。

【問9】 文中の C ・ D ・ E にあてはまる会話文として適当なものをそれぞれ選び、(ア) ～ (オ) の記号で答えなさい。

- (ア) 無理だよ、秋庭……
- (イ) まずいよ、早くあやまらなきゃ
- (ウ) どうしよう……。バックするか
- (エ) どうする、秋庭。このまま、まっすぐ進もうか
- (オ) じゃあどうする。むこうも相当急いでるぜ、突っこんできてる。仕方ないよ

【問10】 ——⑧「茂夫は笑いたくなくなった」とありますが、これに関する次の説明文を読み、文中の(1) ～ (4) について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

狭い道を走行する茂夫たちのトラックの前方に、もう一台のトラックが迫ってきてきます。茂夫にとっての「常識」からすれば、このような場合は(1)

<p>(ア) どちらかが道をゆずって事故を避ける</p> <p>(イ) 両者ともに利益を得られるよう考える</p> <p>(ウ) 相手にとりあえず謝罪をして和解する</p>	<p>(エ) 自分たちを挑発してきている</p> <p>(オ) 自分たちと同じような立場だ</p> <p>(カ) 自分たちにとってライバルだ</p>
--	--

の(1)が適当な判断と言えるでしょう

う。しかし、前方から近づいてくる相手が(2)

と瞬時に見て取った秋庭は、

(キ) 顧客に指定された時間を守ることを優先しました。その後、二台のトラックは直進し、どちらも

(ク) 質の高い商品を相手に届けること

(ケ) 誇りをもって仕事に取り組むこと

損傷しますが、「悪い」の一言で場が収まるのです。この出来事に「笑いたくなくなった」茂夫は、

(コ) これまでに経験したことなかったようなスリルと快感

(カ) あきらめかけた仕事をなんとかやり遂げたという安心感

(シ) 自分にとっての当たり前がもの見事に覆される痛快さ

を覚えたのでしよう。

【問11】

⑨「茂夫は工場に帰ったら吉沢をオヤジと呼んでみたいと思った」とありますが、これに関する次の説明文を読み、文中の [a] ～ [j] に当てはまる語句として適当なものを選び、(ア) ～ (シ) の記号で答えなさい。

何もしていないよりはましだという [a] で町工場に勤めることになった茂夫は、当初トラックの運転手という仕事を長く続ける気などまるでありませんでした。それゆえ、知り合って間もない工場長を、他の工具にならって「オヤジ」と呼ぶことには [b] があり、ただ一人「吉沢さん」と呼んでいたのです。

しかし、自分の人生がおかしな方向へいってしまいうように感じながらも茂夫はきちんと工場へ出勤しており、だんだんと茂夫は、工場に対して不思議な [c] を感じていきます。

一方で、吉沢が褒めてくれた、得意先の工場の失礼な担当者に冷静に対応できたのも、この業界において自分が [d] であるという割り切りがあったからであって、新しく求人を始めるといふ吉沢の話を聞いた時にも、これも夢も終わりだと感じたただけであり、工場にいる時間は [e] だったと思おうとしていました。それでも茂夫は、どこか虚しさを感じており、自身の中に生まれつつある [f] に気づいていったのでしよう。

その理由を探るべく、工場を「巢」に喩えてみた茂夫でしたが、同級生であり同僚の秋庭からは [g] という返事しか戻ってきませんでした。それでも、秋庭の「(工場の) 水に合わねえよな、あんたは」といふ言葉に対して、口にしそうになった「[h]」という言葉を飲みこんでいます。はつきり言葉にすることはできなかったものの、自分の中に抑えがたい感情のありかを、茂夫は確実につかまえていったのです。

そんな中、川崎の工場街で起こったトラック同士のちょっとした接触事故を、 [i] で片づけてしまった秋庭の姿に茂夫は信じがたい思いを抱きつつも心を動かされず。

トラック同士が擦り合っても [j] に間に合わせようとする秋庭の姿に、自分がこれまでこだわってきた考え方

がほどけ、工場とそこで働くひとたちにあらためて近しさを覚えた茂夫は、工場に帰ったら吉沢を「オヤジ」と呼んでみたいと、初めて思ったのです。

- | | | | | | | | |
|-----|---------------------------|-----|---------------------------|-----|---------------------------|-----|--------------------------|
| (ア) | あいまいさ | (イ) | 激しい嫌悪 <small>けんお</small> | (ウ) | 約束の時間 | (エ) | 心地良 <small>こちよ</small> い |
| (オ) | わからない | (カ) | 軽い気持ち | (キ) | 人生の休暇 <small>きゅうか</small> | (ク) | 片手拝み |
| (ケ) | 居心地 <small>いこち</small> よさ | (コ) | 強い違和感 <small>いわかん</small> | (サ) | 新たな感情 | (シ) | よそもの |

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

十八歳さいくらいのときだったか、とある専門家に私の運動機能を見立ててもらったことがあった。私は絨毯じゅうたんの上に置かれ、指示に従ってもぞもぞと動いた。しばらく観察した後、彼かれは言った。

「君の運動発達は、そうだな、両生類と爬虫類はちゅうるいの間くらいかな」

面白い冗談おもしろい じやうだんを言う人だなあと思った。じゃあ私は、これから何万年もかけてリハビリをして、進化の過程をたどった末に、ようやく人間になれるということだろうか。そう思ったらなんだか可笑おかしくなった。

しかし少ししてから、「待てよ」と思った。トカゲもイモリも、すでに確固とした彼らなりの動きを持っていて、外部環境かんきょうと強固きやうこに協応構造きやうおうを保っているではないか。①特に彼らの生活が不自由ふじゆうそうには見えない。

それに比べて私の体は、周囲との協応構造を取り結ぶのに困難をきたしている。私の動きを単体としてみたときには、両生類や爬虫類の動きと似ている部分があるのかもしれないけれど、環境との協応構造があるかないか、確立した運動を持っているかどうかという面で見たら、私よりも彼らのほうが、ずっと適応がよいのである。

しかしこの、環境への適応の悪さ、言い換かえると身体外協応構造が確定しにくいという特徴とくちょうは、逆に言えば、周囲とどのような関係を取り結べるかの②選択自由度せんたくじゆうどが高いともみなしうる。そして、この協応構造の自由度こそが、人間に特徴的なものの一つだと
言われている。

たしかに人間は、他の多くの生き物と違って外界に対して不適応な状態で生まれ落ちる。生まれてすぐに寝返りを打ち、数時間のうちに自立歩行ができるようになる仔馬は、世界との協応構造を迅速に取り結べるが、人間はそうはいかないのである。

しかしこの不適応期間があるからこそ人間は、世界との関係の結び方や、動きのレパートリーを多様に分化させることができる。とも言える。その関係の多様性は、馬とは比べ物にならないほど大きい。無力さや不適応こそが、人間の最大の強みでもあるのだ。人類の歴史も、個人の発達も、他の動物に比べて多様性と変化速度が大きい背景には、この「自由度の大きさ」という特性があるのだそうだ。

身体外協応構造だけではない。人間は身体内協応構造についても、^③隙間が生じやすい。たとえば、空腹感や便意といったいわゆる生理的欲求と呼ばれるものは、「このままだと体が維持できませんよ」というメッセージだ。それは私の身体内部に生じた恒常性の乱れ、言いかえるなら身体内協応構造の中に生じた隙間を私が感受したときの主観的な体験である。そしてまた生理的欲求は、空いた隙間を修復するための何らかの行動を突き動かす内的動因とも言えるものだろう。

便意について考えてみると、トイレトレーニングを始める前の赤ん坊の場合、排便は「しなくなったらいつでもどこでもする」となっている。便意という形で立ち現れた身体内協応構造の隙間は、その場ですぐに排泄行動によって消失するため、便意と向き合う時間は少ない。【あ】

やがて成長するに従って排泄のルールを学び、「しなくなったらいつでもどこでもする」わけにはいけなくなり、隙間が空いたままの期間が長くなる。そのため、便意という自らの生理的欲求と向き合い、それを明示的に認識する機会、いわば「おあずけ期間」が生まれる。つまり、「トイレ以外の場所では排泄を行いません」という排泄ルールの形で規範（身体外協応構造）ができあがるにつれて、身体内協応構造の隙間（生理的欲求）に向き合うことになるのである。【い】

身体内協応構造にしろ、身体外協応構造にしろ、そこに空いた隙間は、つながろうとしてもお残る、つながれなさのことである。

この隙間は、私と人のあいだにも、私とモノとのあいだにも、私と私の身体とのあいだにもある。

しかし、人間はこのつながれなさを持っているからこそ、その隙間を埋めるように、他の人とつながるための言葉をつむぐのだし、外界にあるモノや自己身体との対話や手探りを通して、対象のイメージを繊細に分節化していくのである。もしも人間につながれなさがなければ、言葉もイメージも必要なくなってしまうだろう。私の意識に捉えられる世界や自己の表象というのは、協応構造にできたそんな隙間に産み落とされると言ってもいいかもしれない。

④ このように考えると、世界と身体とのあいだであれ、身体の内外部同士であれ、協応構造が取り結ばれていないという状態は、必ずしも未発達とか不適応といった消極的な意味合いにとどまらないことがわかる。できるようになっていくことや、より適応していくことだけを「発達」とみなす従来の考え方には、どこか重大な落とし穴があるような気がしてならない。【う】

協応構造の隙間について考えるうえで、最初に述べようと思うのは、便意についてである。便意とか食欲とか、いわゆる生理的欲求と呼ばれるものは、私の運動を引き起こす身体内部からの動因として重要なものだ。実際、一人暮らしをはじめたばかりの私を最初に動かしたのは、便意だった。

身体を構成するさまざまなパーツは、各々ばらばらに動いているわけではない。あるパーツの動きを他のパーツが拾って応答し、その応答をさらに別のパーツが拾うといった、動きや情報の流れがある。この流れが、身体内協応構造を形作る。【え】
身体内協応構造が順調に流れているときには、私は特にその流れを意識することはない。しかしその流れに、衝突やよどみや隙間が生じると、私の意識はそちらのほうへ向く。便意というのも、そういった流れの隙間を私の意識が感受したものだと言える。すなわち、腸の蠕動運動は身体内協応構造の流れから来る運動だが、排泄を保留するために肛門を閉めるという運動は、身体外協応構造（社会規範）の流れから来る運動で、その二つが私の下腹部で互いに衝突することによって生じる。それが便意なのだ。

そしてその二つの流れが衝突する場所に空いた隙間において、便意と私とのあいだで対話や交渉が行われることになる。私の場合

は、他の多くの人間と比べても、よりいっそう隙間を埋めにくい^うため、この便意との関係も複雑に分化しているようだ。その様子について述べることにしよう。

多数派の規範を刷り込んでいくプロセスのうち、人生のかなり最初のほうに位置づけられるもの一つに「トイレトレーニング」がある。私の場合、トイレトレーニングの刷り込みについても、三十二歳^{さい}現在^{げんざい}いまだ完了^{かんりゅう}していない。

「トイレ以外の場所で排泄する」という運動は通常「失禁」と呼ばれ、多くの場合は、^⑤誰にも（便器にも）拾われることなく空を切る運動と言えるだろう。普通、排泄という規範化された運動は、腸の蠕動運動から始まって、それを便意として感受しながら引き続きトイレまで歩くという運動をし、トイレのドアを開けるといいう運動、ズボンや下着を脱ぐという運動、便座に腰掛けるという運動、そして目標であった排泄運動によっていちおう終結する、一連の運動連結パターンである。

しかし私の場合、特に私の体と協応構造を取り結んでいるアパート以外の場所では、この排泄規範から脱線しないためにいろいろと厳しい条件が必要になる。

A トイレのある場所まで移動するのは、私の場合歩きではなく車いすだから、トイレまで至る行程に段差がないという条件が必要だ。ドアを開けるのも通常困難なので、自動ドアである必要がある。はいているものを脱いで便器に腰掛けるという運動については、便意の大きさがある程度以下で、体のコンディションがよくて、手すりの位置や便座の高さなどがちょうどよければ一人でできる可能性もあるけれど、基本的には手伝ってくれる人手^{かいてししや}＝排泄介助者の存在が不可欠である。つまり、腸の運動や私の運動を受け止めてくれるような、人やモノとの特殊な身体外協応構造^{ていしよ}がなければ、排泄運動は可能にならないのである。

B、身体外協応構造が可能になるような、これら排泄介助者や使いやすいトイレといった条件がすべてそろうという可能性は、非常に低い。特に私の場合は二四時間介助者がついていないわけではないので、街の中などで急に便意に襲われ、通行人などに声

をかけて手伝ってもらおうという局面も生じる。

これまでの経験から、「あの、すみません」と言ってお相手の目をじっと見たときに、その人の姿勢がどのように変わるかをみれば、おおよそこの人は手伝ってくれるか否かを推測できる。手が前方に出て腰をかがめ、「どうしました？」という風情で一步私のほうに身を乗り出してくる感じの人はうまくいくことが多い。逆に、手が動かなくて視線も合いにくく、距離を保たれている感じのときにはうまくいかない。

これは、「融和的なまなざし」があるかないかを見抜くポイントと言い換えることもできるだろう。しかし見抜けたからといって、いつでも手伝ってくれる人を見つけれられるわけではない。だからどうしても私の場合、排泄運動というのは脱線しやすく、多くの人と比べると失禁に至る可能性が相対的に高くなってしまふ。

C 私は、腸の蠕動運動や便意というものを感受すると、まずほとんど反射的にそれを押さえ込もうとする習慣を持ってしまっている。いったん排便運動に私自身がゴーサインを出してしまうと、後ろ盾を得た腸が「待ってました」とばかりに蠕動運動を強め、間に合わずに失禁してしまうことを知っているからだ。それに、「排泄をする」という目標を持ってしまふと、焦りによって身体が硬くなり、ふだんだったらできるような運動すらもできなくなってしまう、便座に座るまでの運動がしにくくなるということも生じる。

そういう理由で私は、腸の蠕動運動や便意を無視し、「排泄をする」という目標意識をぎりぎりまで持たないでいられるように、別のことに意識を散らしてはならないのだ。

便意というのは、時と場所を選ばずに突然やってくる。それは、食事をしているときかもしれないし、映画を見ているときかもしれないし、仕事をしているときかもしれない。

はじめ便意は、後ろからフランクに肩をたたかのように、私に「よお」と声をかけてくる。私は、古くから知る地元の不良に声をか

けられたときのように内心びくりとして怯えるのだが、それを奴（便意）に悟られたら猛攻撃に転じることを知っているので、気づかないふりをして、そのときやっていることを続ける。

奴はいったん引き下がり私は束の間ほっとするのだが、またしばらくしてから、今度は先ほどよりも強い調子で「よお、聞こえてる？」とばかりに絡んでくる。

(ア) そして背中にじっとり汗をかきながら、穏やかな説得にかかる。

(イ) そうしたら私はいったんやっていることを中断して振り返り、初めて奴のほうを向く。

(ウ) 「今朝トイレにはちゃんと行ったはずだよ。食事もそんなにとつていないし、何かの間違いじゃないの？ もう一度確認してみたらどうかかな？」

(エ) 絡まれては無視をして引き下がる、というサイクルを何度か繰り返しているうちに、便意の頻度と強度は増していき、そのうち無視が通らなくなってくる。

そのような説得で引き下がってくれるときもあるのだが、たいてい交渉は難航し、喧嘩腰の言い合いにエスカレートしていく。「これは勝ち目がないな」と判断したら、私は表向き奴との口論を続けながらも、横目でトイレの場所や排泄介助者の存在を確認しはじめる。ゆらゆらと体を前後左右に揺らすが、まだ奴に対して負けを認めてはいけない。なぜなら、負けはその場での排泄Ⅱ失禁を意味するからだ。

それはまるで、私と腸との協応構造がほどけて、あいだに隙間が生まれ、腸という私とは別の人格が現れたかのようだ。

このように腸は、私を邪魔するように挿入的に便宜という自己主張をしてくるので、私は協応構造を回復するために彼との交渉をすることになる。介助者と使いやすいトイレがそろっており、腸とのあいだにスムーズな協応構造が成り立っているならば、交渉

の必要はない。バケツリレーのように腸の運動がそれに引き続く全身の排泄運動に連結する。しかし協応構造に隙間があくと、そこで行くと百八十度向きを変えて、腸と私のあいだに対面交渉が始まる。多くの人も腸との交渉経験が豊かな私は、「私が焦ると調子づく」とか「無視すると引き下がる」とか、腸がさまざまな態度に出ることを知っており、便意というひとまとまりの総称では語りきれない、細かな感覚の分化をしていくことになる。

⑥ その悲喜こもごもは、傍目からみると理解しにくいものだろう。友人の証言によると、奴との交渉をしているときの私は、人から話しかけられてもまともな返事ができず、心ここにあらずの状態で、ときどき訳のわからない独り言をぶつぶつ言っているらしい。

便意という他者に襲われ、交渉しているときの私の身体は、失禁してしまうかもしれないという緊張のあまり硬直している。その過剰な身体内協応構造は、介助者やトイレとの関わり合いを難しくする。その結果、最悪「失禁」という事態に陥ることになる。

失禁は、焦燥や不安が、悲しみや恥辱へ、ゆるゆると溶けていく過程だ。それは同時に、腹痛という生理的な苦痛からの解放でもある。直前まで硬くこわばっていた身体も、ゆっくりとほどけていき、ぐにやりとやわらかい、重ったるいような体へと変容していく。そしてこの緊張から弛緩への移行は、屈辱と同時に一抹の恍惚を伴うものだ。

失禁における恍惚というのは、先ほどまで敵対関係にあった「腸」という他者に屈し、身をあずけていく過程であり、いわば「腸」との和解、あるいは、隙間が薄らいで「腸」との協応構造を回復し、また一つの身体に戻っていくプロセスだ。

しかし失禁には別の側面もある。それは外界からはぐれる体験でもあるのだ。なぜなら失禁をしたことよって私の身体は、もはやトイレとも、トイレを手伝ってくれる介助者とも、公共施設とも、友人とも関わりあいを持って宙に浮く、「穢れた身体」になっってしまったからである。

失禁した状態でそれらのモノや人にうっかり触れたら、相手をも穢してしまうことになるから、私は手も足も出せなくなる。つまり⑦ 失禁とは、腸との協応構造の回復体験であると同時に、他の多くのモノや人とのあいだに成立していた身体外協応構造にぼつか

り隙間があく体験でもあると言えるだろう。

失禁した私から見える世界は、その多くが、私とは関わりを持たずに動く映画のようだ。街行く通行人、楽しいな街角、忙しい喧騒は、私からは遠く、スクリーンを隔てた一枚向こう側に見える。そのかわり、これまではあまりに当たり前すぎて協応構造でつながっていることすら無自覚だった地面や空気や太陽は、くつきりとまぶしくその姿をあらわし、私の体はそちらへと開かれていく。彼らは失禁しようがしまいが相変わらず、私を下から支え、息をすることを許し、上から照らす。

活気あふれる人の群れから離れていく疎外感や、排泄規範から脱線してしまった敗北感と同時に、力強くそこに存在し続ける地面や空気や太陽や内臓へと開かれていく開放感の混合。

⑧ 失禁には退廃的ともいえる恍惚がある。

【問1】——①「特に彼らの生活が不自由そうには見えない」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中か

ら選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 両生類と爬虫類は、周囲の環境の変化に柔軟に対応できる運動機能を持っているということ。
- (イ) 両生類と爬虫類は、極限的な環境下においても自由で機能的な身体を保持できるということ。
- (ウ) 両生類や爬虫類は、確立した動きを獲得したが、進化の過程に逆行する部分もあるということ。
- (エ) 両生類や爬虫類は、どんな環境下でも生き残るために、単純な身体構造に進化したということ。

【問2】——②「選択自由度が高い」とありますが、どのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の

記号で答えなさい。

(ア) 人間は、他の動物に比べて身体構造が確立していないため、多様な動きを身につけることで、生存上必要な力を発達させられる可能性があるということ。

(イ) 人間は、他の動物に比べて誕生後すぐに活動できないため、異なる種と群れを作って世界と多様な関係結び、生存の可能性を高めてきたということ。

(ウ) 人間は、生まれてすぐに環境に即して行動できない分、様々な方法で世界に接することになるため、生きる中で学習する余地がたくさんあるということ。

(エ) 人間は、生まれた環境に適応できない場合にも、他の動物の生き方を参考にしながら、様々な生存方法を学ぶことで人生を充実させてきたということ。

【問3】——③「隙間が生じやすい」とありますが、これに関する次の説明文を読み、(1)～(3)について適当なものをそれぞれ

選び、記号で答えなさい。

ここで筆者が述べている「隙間」とは、具体的には(1)

- | | |
|-----|-----------------|
| (ア) | 尿意を覚えてトイレを探すことで |
| (イ) | ぼうこうがいっぱいになることで |
| (ウ) | 身体の一部を他者と感じることで |
- 、普段の

安定した状態に乱れが生じることを指す。一方で、生理的欲求とは(2)

- (エ) 尿意をもよおしていること
- (オ) 尿意を制御しようとするせいぎよこと
- (カ) 尿意に向き合おうとすること

である。人間は、生理的欲求によって気づかされる「隙間」を埋めないではいられない。しかし、成長すると社会におけるルールを身につけるので、

- (3)
- (キ) 「隙間」を埋めること自体が、理想的な目標になっていることに気づくのである
 - (ク) たとえ「隙間」が生じても、生理的欲求に答えられない場合が出てくるのである
 - (ケ) 自身の感覚が研ぎ澄まされることで「隙間」に敏感に反応するようになるのである

【問4】 次の文は本文中の【あ】～【え】のいずれかにあてはまります。その場所として最も適当なものを選び、【あ】～【え】の記号で答えなさい。

自分の生理的欲求に突き動かされて行動するだけではなく、行動を保留にしながら自分の生理的欲求と向き合うことも、人間の特性の一つかもしれない。

【問5】

④「このように考えると、世界と身体とのあいだであれ、身体の内外部同士であれ、協応構造が取り結ばれていないという状態は、必ずしも未発達とか不適応といった消極的な意味合いにとどまらないことがわかる」とありますが、これに関する次の説明文を読み、(1)～(4)について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「協応構造が取り結ばれていないという状態」とはどのような状態を指すのだろうか。筆者によると「協応構造」とは、

- (1)
 - (ア) 身体内部における各器官同士の情報伝達とそれに伴う動き
 - (イ) 身体の内側から肉体と精神のバランスをとろうとする動き
 - (ウ) 自身の健康に関する情報を管理しつつ統制しようとする動き
 - (エ) 生き物がより長く生きるために選ぶ、住環境のありよう
 - (オ) 生き物が種を繁栄させるために行う、効果的な生殖方法
 - (カ) 生き物が生存する環境にふさわしい、安定した運動様式

を指している。
- (2)
 - (キ) 言葉を用いて外の世界とのかわり方を模索し、様々なつながり方を発見する
 - (ク) 他の種の身体と比較して、人間の身体が劣っている箇所を補う方法を見つける
 - (ケ) 不自由に身体を慣らしながら、どんな困難にも耐えられる身体に鍛え上げる

ことができる。

こうした「協応構造」が「取り結ばれていないという状態」は、日常のあらゆるところで見受けられるものだ。それゆえに、こうした状態を「未発達とか不適応」と意味づけることに對して、筆者は違和感を覚えている。人間は生まれてから外の世界に適応するまで多くの時間を費やすが、実は、その不自由な状況を強いられる期間があることで、

つまり、「協応構造が取り結ばれていないという状態」があるからこそ、人間は（4）を生み出しうると筆者は考えているのである。

- （コ） 新たな「協応構造」
- （サ） 高尚な「目標意識」
- （シ） 強固な「自己身体」

【問6】

——⑤「誰にも（便器にも）拾われることなく空を切る運動」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、（ア）～（エ）の記号で答えなさい。

- （ア） 失禁は、現実の社会に生きる人々にとつては想像しがたい行動であるとともに、現実味に欠けた空想の世界に起こるような行為だということ。
- （イ） 失禁は、便器に向かって排泄するつもりが空振りをしてしまった運動であるとともに、社会の中で受け入れられにくい行動であるということ。
- （ウ） 失禁は、行為後のあと片づけに多くの時間と労力を空費する行動であるとともに、周囲の人々も多くのエネルギーを費やす行為だということ。
- （エ） 失禁は、排泄先を間違えたために便器が空っぽになる運動であるとともに、行為者による社会規範への挑戦を意味している行動だということ。

【問7】 A・B・C に当てはまる語として適当なものを次の中から選び、それぞれ (ア) ～ (キ) の記号で答えなさい。

- (ア) また (イ) さらに (ウ) しかし (エ) すると
(オ) ところで (カ) それゆえ (キ) たとえば

【問8】 文中の [] の各文について、意味が通るように並べ替え、その順番を解答欄の指示に従って (ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

【問9】 ⑥ 「その悲喜こもごもは、傍目からみると理解しにくいものだろう」とありますが、これに関する次の説明文の a ～ c に当てはまる言葉として適当なものを、指定された字数に従って本文より抜き出し、それぞれ書きなさい。

「悲喜こもごも」に至る過程は、腸がいきなり a (4字) をしてくることから始まる。さまざまな態度に出る腸と b (4字) を行う筆者の様子は、そばで見ると c (10字) を言っているようにしか見えないのである。

【問10】 ⑦ 「失禁とは、腸との協応構造の回復体験であると同時に、他の多くのモノや人とのあいだに成立していた身体外協応構造にぼつかり隙間があく体験でもある」とありますが、どういうことですか。これに関する次の説明文の a ～ c に当てはまる言葉として適当なものを後の (ア) ～ (オ) から選び、それぞれ記号で答えなさい。

すでに確認したように、人間は便意という生理的欲求を感じたととしても、それをすぐに解消できるとは限らない。そ

の意味で失禁とは、人間を腹痛という a から解放するものだと言える。便意に抗^{あらが}う経験の多い筆者にとって、自身を苦しめる便意をもたらす腸は、自身とは別の人格を持つもののように感じられている。そのため、筆者にとって失禁は、腸が自身の b として安定を取り戻^{もど}すきっかけになると言えるだろう。

一方、失禁は、筆者を社会のルールから逸脱^{いつだつ}させて、筆者が外の世界に受け入れられないことを認識^{にんしき}させる経験にもなる。つまり、失禁を通じて、筆者にとっての社会は突如^{とつじょ}として c となり、筆者は疎外感^{そがいかん}を覚えるのだ。このように、筆者と社会とのあいだに隔^{へだ}たりが生じることを、筆者は「隙間があく」という言葉で表しているのである。

(ア) 身体の一部

(イ) 人格の混乱

(ウ) 身体的苦痛

(エ) 相対する他者

(オ) 臓器の代表例

【問11】

⑧「失禁には退廢的ともいえる恍惚がある」とありますが、どういふことですか。これに関する次の説明文の a ～ e に当てはまる言葉として適當なものを後の (ア) ～ (カ) から選び、それぞれ記号で答えなさい。

人間は成長していく過程で、生理的欲求を我慢するようになる。その理由は、生理的欲求を満たしてよい時間や場所に関するルールを身につけるようになるからである。筆者は、これを、 a と表現するが、一方で、身体が社会規範を習得することによつて、人間は社会とつながるとも言えるだろう。失禁という事象について考察をめぐらす筆者は、 b と冷笑しつつ、社会規範からの脱線を、身体の一部を「他者」に喩えることで表現する。失禁は筆者の社会的なつながりを脅かすものであり、筆者は失禁することで敗北感を覚えるのだが、しかし同時に開放感も覚えていることに、ここでは注目しよう。失禁という体験が、筆者に敗北感と開放感という相反する感覚を同時にもたらすのはなぜだろうか。

筆者にとつて失禁とは、腸との真剣な交渉が決裂し、腸の要望に負けたことを意味するとともに、生理的な不快感や衛生面における忌避感によつて、道行く人々が筆者に距離を取ろうとすること、言い換えれば、それまで関わりを持っていたはずの通行人や街の喧騒といった c ことを意味する。こうした疎外感・孤独感をもたらす失禁は、筆者に敗北感を味わせるのだ。

しかし同時に、失禁は、腸との真剣な交渉の終わりを意味する。失禁は、腸との交渉から「解放」することで筆者に疎外感をもたらしながらも、実は、地面や空気といった外なる自然や内臓という内なる自然が、筆者の身体をずっと d ことへの気づきをもたらす。

つまり、筆者は、失禁という体験を通じて、「解放」を体験すると同時に、より大きな自然とのつながりに自らが「開放」されていたこと、そしてこれからも「開放」され続けていくことを認識すると言えらるだろう。失禁は社会のルール

に反するものだが、筆者にとってそれは、その心身に経験させるものなのである。

e

ことを感じさせる、うっとりとするような気持ちよさを、

- (ア) 外界から筆者がはぐれる
- (イ) 腸との交渉経験が豊かである
- (ウ) 「おあずけ期間」が生まれる
- (エ) 下から支え、上から照らしている
- (オ) 自己と他者とが同一化していく
- (カ) 自身が世界に開かれてつながっていく

【出典】

I 鷺沢萌「涼風」『海の鳥・空の魚』（角川文庫、一九九〇年、五三〜六一ページ）。

II 熊谷晋一郎『シリーズケアをひらく リハビリの夜』（医学書院、二〇〇九年、二〇六〜二一六ページ）。ただし、問題作

成の都合上、一部省略したところがある。

